鶉衣

後編

上

へ 5
4434
4

門へ5
號4434
卷4

昭和九年
九月一九日
購求

錄仕入

こがらす後編

歌老辭！

芭蕉翁は五十一にて世をさりぬ此文を作り
給ひしは五十二にて一期を終りにけり
末二年の辭世と殘せりし虛弱多病なるにもか
ゝはらずして今年は五十三にて秋も三あまる歟の
中途にあき人の逃るはいつくにか行
よせにしとよみて欲られんもやさしきあとに
なりけりされども世に立交らんとにぐるまぶ
るまりゆきて招も苦れ友あるにしあり一社
まつらるゝあきいやつゝ世にしたがふ
うちみるまへにも耳にもあるまじ

[illegible]当時のもやり河をもつねぐそれい
行ゆ行事へとと招問案内をむつ〜うて拙お撲
ル拳汚もさいきい次く送されと奥の方よ只一人
火燒蒲堂の前ものとすておむひうまいうまと
とそうあよ生る人ものも赤〜とれいいても行のう
しけうきるうあ〜心六十の髪をまきあて小国
乃軍にむいい五十の新よ和〜ういく三千の浦の
奉墓にもいるいつもう赤を欲すやある家も
浄うもおも〜幽も昔い今のよまうい〜うのとかと
老人こともに生〜ふうの勇ものう拙い法事
ま面白れもの今のふられう面白うめまく昔い我う
面白うりしあり赤られ人くまうとまれど我も乃乃

〜ふへうきう刃のもきとかあやとひやうふうと
刃の赤を忘れされと赤〜くもかうまれと
刃の赤と忘れて例のくまいやうられくあるみ
あき泥色のうにあやまうもう生てんされと赤ハ
見る〜〜又赤ハ忘る〜〜うに二の境まこうにな
う〜や今ものう蓬莱の店をうさんに不老の薬
ハうとかもう不死の薬うあうといいうもと
一洗ようけ袋うもう不老をもれと行うもん不死
うもう不老あはうするもう見ぬ〜〜神仙
不死行のうもあにうう秋風よ向く感慨多うも
と前ま訓をもう〜〜とうもうもの〜行うく
人いよきうもの赤まひあうもや業あるいひ〜四十

こゝれのかはきゝふあへてのうへにハ男とさりつの縞ありとらひし七十まてハいつもあるへきこゝにいきつさら物はきをいつくあさり漢の耳にやうらんとそを花のところまりきまた不用の古銭いろあるハいつにままさらんとそ此編こゝに事を拭之

四藝賦

琴碁書画ハ吳雲の游浮するへきニつにあるある評なりとさへいへく名をとりて浄せむに琴ハことさらふの吳なるやうにしこにまいかへくらう隠者出人のもてあそひにうして十三絃に不せきしに二十五絃のいろそありきもうかる山嶺の松風にやさらひけんさるも妄絃の琴を掻く意ありとよのしみけんハこてあきに戸の物のせんと鎖く月さる世にハ似よりたり碁にあける人わとうふや渇しきにあらしさしむうひさるゆの無念掴る士ハ今門に腰を折しなきのつれと交る身にても貧なハあすの米櫃のあてなき事をおもれ夏ハ入日の西に迫りく膝の上まてさし入れても地を浩りかまきましてそ始く蚊の羽をかきさと笑く菓子盆手燭の付るを驚くみふはつかれの事家々無常を花衣の上にて歎大煙蒲団子吸物ハいつの名まふにこたせりんとその煙とりかのとのれるくあたのことをのきとれを裄よりかのハうしらたにまみ家とれをよとあるに似より

その端師の斧朽ちて七世孫にあひ一時久しき
年月の別あらら世をへきるのひとつもありがたく
大きなる損とならへ我りとより不株根めて此樂
をもくさるふるき恨ありさて是のつとちうめい
こてにあらなほ一きこさもりまも上京の人は清宮
文章にのミをを深め出給もいやしうぬ文孫ゆ
万世の後も名ふとくむへ一所ありる人は日用乃
ものよりも用申さて或は文庫の学ちに何々何庫
以錢何百何十文と定家やふ乃様ふ法もいと口おく
又は以著利分をりよりて筆編に者をなると文
徴所に法とのこれもまけちきこさまてなの外
物ありまるあるはいろ世界よりあ安きこて要なるへられさく
能筆うきりて一字ら二字ゆ用もをとをいれ貴
こをりよ似て安下よりこうも又画をり絵乃
尽をあるふ所一能画のくいさもいろをあ絵
乃男は癒くさしくく大津絵の名品は肥く衰弱
うき世絵は又平に始り菱川ゆ定り今西川ゆ定
りをいい一一藤竜屯の屏風ゆ墨栗けり牡丹ゆ
ゆ花咲く人より大きなる雛の名のむゆよりあり
りて日さもりるをあれ又は薮寺ゆ上るゆ
遠水よ波をく遠人の目鼻あるやに帆ゆ舟ゆ
ゆく波をこれら絵ゆあるいはさるへ一
俳諧師の絵は上ゆのゆ法あ一をて翁也

ゐるものこゝのへハ我も我流の手ぬぐひをかけて
諸の壺焚とうけて線蓋のたゝてありてこれとこ
ゝろうちあるれ耻さゝめるきあるゝきかゝす
さらゝゝハよゝと古田の法師をもとなる前撰人
なりて以年比祝の酒あるを遊ぶるまてあるる

原屋辯

舞山の月ハこゝゝゝゝて白ゝゝゝ五湖のみも沈
して窺ゝゝ垣ハ紫陌よ傳ゝて大原の市
もへゝゝり菴ハ芙稲の陰よりれも小原の
淺藪よりも淺しされて昔の原者をとゝよ徳ある
人の世にさゝふとむつりかり仇ある人の敵と思れ
てさゝゝゝゝ名をもとゝる思ひ内徳をも
仇もあき人のみもゝく四条五条に金れ貴族を匠
ゝりゝも同へきよりの人ゝゝゝゝあるきく
ゝむきもせゝゝむ和ひのかゝゝんもを尋る
異のあれゝゝあれさるをうき世にゝゝれ新なる
中ゝくもつゝきゝ少ゝをするいゝ中世に原屋乃
二字金ゝゝむとみゝゝにちきゝ明の月さこゝて
門ハ詩に用させかりるも人よあハしくゝひてまり
ゝゝむさゝゝるもある原屋ゝりゝ和ゝを社ゝるゝ
と生すりこ不ゝる原屋をもちしゝて人もよゝ
ゝるなゝむゝれハ後世まゝゝきゝる人乃
あゞ佛をこゝへカにゝてゝるくゝなゝるゝけぬ

へ[illegible]さもあらて余つ逃あき人ハ弱き[illegible]寝の志つら
つくしまも飽けを次第に[illegible]くしく[illegible]
ハくいよ申りあり[illegible]れハ長きあれをとあれ
[illegible]の法水にこそ[illegible]
とそうへし始ハ俗なる人もある一花山の上皇も
[illegible]き名ハ[illegible]をひとりとさるハ少心の秋夜
まいれ俗の語みよりかなしくもいよ
[illegible]ゆくまいらくせいたるへき
[illegible]我身の上さいうしこき法を
[illegible]久しくれとかくもと毒
[illegible]ねと人よあるとて一身をそて雨
[illegible]みるもみ思もあるれく
世よ人よ我もあるを只[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]ハ南郭ら等を吹りん此身のうへのそうし
[illegible]は老と病を一箇にしてこき世の関ハのうれ
出[illegible]れを誰をあれ行を駐くさのこハ
逃[illegible]
桃よ菖蒲よ神[illegible]
[illegible]ハとそ[illegible]
[illegible]ハこそ[illegible]
[illegible]遁世者とそいいへ[illegible]と押なて居
[illegible]
通称とあるて行灯桃灯のそちこ[illegible]

叶ふるを益るきるすいあるとあるをとてとるて
はいつくの極みう市中の門柱に張左某とかるる
家れをみるくこさをとるとるとるる四紀八しる
う今やあのよにあるあれを張左しる拾てて
きるくしき張ふるるよ及うすうれ人をよをてれ
くに門おをるるる市中みをきのうき世ようやう
まくくれ又御をにはをんるをとて家を拵る
門るるをて拙きるよ人を踏るう張左のれを
いてるくきふあるくるとるる世のさ毎うれ恵とげ
食傷して好よ人のるるひるるくし
四角ある深世れ好多ハきをふるう

刺髪辮

生るくて天地のるるの理ありて姿ある〜くきるる
ありて後名ふある〜いてや世をのれるうき世
の名をあるくるんるの姿まつあるさ心や今や
さるやきの世るをとてハ林儒の未髪ようや似ん
釋氏の剃髪ようやうくと模稜のようさるる
うるあるくる生涯の仕上あれを一大ようの分別ふ
ありるとるるるるるるるかのこ髪のう
あくもつるて祇くに只ありけられの自中をとるるれ
髪あるくこて世ふ為みを立くるる揚州の髪ハあるま
みるくよりるとこれを吉田の法師ようるくを
いるある而ようるとるるあるつき法るる紙丹ハるく

さしとて生としてけるの師なりける也　誠に江巾
とらずのあらさらむやまたうたにさりけるものゝ
襟に垢つみて枕に沈つきさらむハむしろ洗清る
へし衣を出家として必やひ定てつかまに剃すへ
きひまりおさめて遍照かよみたんなりちゐく今
ハ世におゐても官路の険難を志のきたとし功
をたてあらぬ名をたてけねかまれるかきに恥るかきに
らく今此志の弟ありとき浮世の塵を剃てつくべき
いそうはしとおもさらんやかゝれとてそれ掻のひ
りぬとこそなりふひも形しされとも儒者の教林を
うるへハあまり様蝶のようなハ父母の遺體を
の咎めあるへし　さるに一朝の怒に喧嘩を起し
二世の契りに心中をなして我と身を亡ほす者
なに別とするハしのなき理にさからふなるへし
を理る其外十家無量にかきる塵まてとめまじき
譬れは爪も髪もかく捨るもおしまれぬ鼻毛も
蜻蛉のうき名をとつなきてくすへ科ともなるゝ
なるへしその上ゟ奴釈世に伝しおもい附き後ハ
孝に剃髪の身ともおいそしりともその世にいふ
塚本のありていましかしは但せかの守りしもの我
よくこれを知る故にちつふゝの遺體を以て寸志を継
とるいへいふへし　それまた釈門に仕へ娑婆の縁をまり
浮き世ハいきらぬるも生まれうき世のさかりとなれ
をあれも煩悩の端をと排ひすてしものから色乃

[illegible]

山せきにかゝるむさぼれとも人ゝ醫者も法師も
利こゝろにて書学ハあるゝもすくなくすきて
書こゝろゆる武蔵世の八要町ハ平部の四方子の
はなをとゝあつて法師も侵略塞も入ゝ出て入巾
八宗の学ゝ問と言ふ宗の朱をも奪んとせられて
佛もあるゝ多くの目利まて四方子怪ハ出のセ
のゝまゝまして引あるゝ多ゝ入道ゝ出て
ゝゝ人をなゝ問て法師まもあるに禄門てもみ
場ゝあてゝ多ゝさハ〳〵世のゝひまて学義ハ
ゝゝす湯茶ゝゝと沸せゝゝの名ハ薬籠と
よゝゝ薬ゝゝ用ゝも学流ハ学ゝんの名と
ゝゝ世のへゝムしも増ゝ入道の号あれと我を場と
も法師ゝよゝゝ人に法〳〵

刹ゝて月まゝての影法師

自名ゝ説

通世ハ学ゝて定ゝあゝてハゝき世ハ名も
あゝゝさるへき二字なゝあゝはやと名をとし
字をゝゝ山ゝ名ハ父母も世にまゝに妻法ゝ
誕生ゝれて忠孝の字義をとゝむ此のまゝ
ゝやハゝへゝむゝ又四書ゝ文の抜書もあまて
人の元をゝまて名をゝ孫のゝゝあゝ
書ゝ原書ハ山ゝを立て骨ゝゝに名ちゝる

さいはゝ博識の門よりいでゝ意味深き書の二字をもあつ
さるゝなるべきれども夫は耳遠ゝれて名はいふと同
学む人のこゝにあるべきあるべの形乃
論をもかゝげたるにこゝにあるべ
一人〳〵に講釈せんいとゝもつゝうあ一一善悪
のゝゝ疎々を西念浄蓮てもみへゝゝ
を世の人のゝゝをみるに今家ゝゝも責られ
万古ゝゝ不易のゝれをもゝゝ
つけても流ゝ名ふるの人ゝあゝもよ
さゝはゝ湖市(ハシ)尼女も完ゝ姫もうき
ゝゝもゝ人のゝく消息のゝにまゝて
ゝ書ゝゝ出ゝあるゝゝ人の歩いく
これは何のゝまゝてゝれは可笑ゝるゝゝと蛇ゝ足
をゝ招小ゝゝ耳をもゝゝて自然ゝゝき字義
ゝけゝゝゝれゝゝあゝ

亀ゝゝゝ似て系広ル

種植画賛

ゝゝゝゝ家ゝあゝいつゝに果ゝゝん
素人絵の懶ゝゝれてあゝゝく衍ゝゝゝく
疫神除の板ゝ押ゝて ひいゝきゝ門とまゝる
其劔と招小ゝゝ つゝゝいゝゝ鞘ゝゝ

雪詣序

こゝ[illegible]和泉の里に世をのがれて秋の月いと[illegible]
きよう語をこゝに山無の鹿を[illegible]
りきれこゝにすむと我もさい人も[illegible]
言れ給い必とい歩んといひ[illegible]
の史徒のこゝろれうゝ林下ちんそうこゝ一人を忘
とらい詩よりこゝにあるこゝにてまこゝさい
小野こゝ[illegible]月のよこゝれとも[illegible]
葉をこゝよこゝにまして[illegible]
より雨を語こゝ[illegible]
の前ハ半俗こゝ俗の活力をあこゝとい小野こゝ[illegible]
[illegible]の天ハのこゝ書こゝ[illegible]
雨い又数のあるこゝ[illegible]
こゝや雨と語こゝ[illegible]
こゝこゝ[illegible]
こゝこゝ[illegible]
てこゝ[illegible]彩色の[illegible]
名にこゝ富士のこゝ[illegible]
蓮に言こゝ[illegible]
こゝこゝ[illegible]
こゝこゝ不[illegible]
の[illegible]
をこゝ言語の一世こゝ俗こゝ

こゝ和泉の里に世をのがれて秋の月いと[illegible]
きよう語をこゝに山無の鹿を[illegible]
りきれこゝにすむと我もさい人も[illegible]
言れ給い必とい歩んといひ[illegible]
の史徒のこゝろれうゝ林下ちんそうこゝ一人を忘
とらい詩よりこゝにあるこゝにてまこゝさい
小野こゝ[illegible]月のよこゝれとも[illegible]
葉をこゝよこゝにまして[illegible]
より雨を語こゝ[illegible]
の前ハ半俗こゝ俗の活力をあこゝとい小野こゝ[illegible]
[illegible]の天ハのこゝ書こゝ[illegible]
雨い又数のあるこゝ[illegible]
こゝや雨と語こゝ[illegible]
こゝこゝ[illegible]
こゝこゝ[illegible]
てこゝ[illegible]彩色の[illegible]
名にこゝ富士のこゝ[illegible]
蓮に言こゝ[illegible]
こゝこゝ[illegible]
こゝこゝ不[illegible]
の[illegible]
をこゝ言語の一世こゝ俗こゝ

言外秘伝のよハうをあらし

脇説

世を捨る法師の拙なる人をたゝ友よかをとる事
なけれ共世間をたゝ世をは事業一筋乃
まつけも嗜気にさくらわれあるもの藜もあるて
拙なる技のこゝにうきもあるなるの事ハ
又なるものをなることをもなるなの慾をきを
なることや我いく世捨られもしきゝ乃
孫を世てもしてものけよやしあるれもなる
凍餒の患ハいとすく出干も煙をきも世法なる
むるをとよまハ子用のものをくハ
ある渡るもるるをと限くくくハ只一用ハ拙の
るるもといくハ一拙なるを用あるなをよるる
拙るハ定却なるくれも煙をおハ拙とあるハく
法中ハ法ハ濃くくくもハ火燈のくくハ代ハ
ないくも一拙にくく多用の省略ハ言地獄
るの術法あるをなるなるよ無呼吸をかるハ拙
嘆く用を兼拙ハ欲なるハ人なるくくる法
乃用をるるる天ハ人をるるハるんるる
の無をあるく月をるるハは因果拙法
よのをるるるく冥帳せるるるの拙るるハ
天のを拙をくくるるハ又ハ無るくらを風流
の月るくく年をを紙のるるるるるハ天の拙

又別つく聖人芝紙より事あるもの中に
猫とらんとすれども遠きもの
ともあるべし何の益なきにしかず
の時さらしつ今所多くてもてきりぬ照み
天地宇宙の間除義あきらかなりの世あるこ
その印いかんといへんよ我らくちの不角といふ
飼てもちまい吟くもちまいこのこころぬ料
紙やものいふもつきあらんさもあるべ調
文のくるい芝ハ仕出の風流ありこれハ細工乃
面白しかといのくく人のくるものあるにのみさ
くされて心を残るさにうれしきあるこ
ろ二ろ西のつるいまちあるいさくもいくハせむ

こゝよ世みれ一をさんハむく一雪月の雑人会ゆ
きく紙の猫を作りしをやてつおの言にうら
ゆくさりしをさわをきくの外をもつよ行て
五侯よりも拡軍ものこらもあるかやもちるを
猫ハいくあるもいるくて毛ゆ人ゆくき
りれくてつおまて拙く出るあさとあるぬ
をせつに我いまして斗搗のみるもあるくるみ
徐に金をとるさをさんるくくの外をもやるし
をくくくの猫とさるるあるるとも豈猫ハ
さくるか

老きしやうにあはさせたる仏をもとに魚
をあみさせて魚をとりに出し女を失ひて
世をこゝろ深く浦のいらみ樽を海に
さしあてゝ泣るゝ人々のおもひまくらるゝ
八仙の天命を授き給ひ只あきなひよと思ふ
給愛の物をもあ只あきなひよと思ふ
ものをもとりさるゝを言ふ世に成
聖の恵を給ふあるハ樹木の菓子を世上
をもつて祈らんいとて解ける涙うるん何と果
狩る悲をまきれん果ハ出又のうだくゝ怪をとゝ
しるひ泣くゝ思ふやうたてるる
魚を帝のみかきさせ力のたて女を
先ゝとりされハ君うん我ゝとりな君又ゝ出て
我を家とへ我うの魚あつて魚をとりさむ只ちみき
なへ〳〵ふる歌きあとゝもあけきあけ
申くまにあけきれ蔭に秋ちみてハ柏のあ乃
うときとも学ゝむ七ゝの日の泣ゝみ乃行の涙
千行ゝ減し百日の墓ゝ金ゝに八百行やゝ十行ゝて
やむまして一周忌のかい餅ゝの日の涙の猟ハ断て
ゝ仏糧つゝく完てうゝ〳〵されゝも節の
結をあゝ桃ゝ鮫の後ひ日みハあゝまゝ〳〵その猟ハ
ゝ十盆の踊のゝ抱ゝハ人ゝ出ゝ物ゝこゝゝさ
ゝ〳〵みハ一生の為あゝうとゝりゝくされゝゝの祝
ゝ〳〵ゝひてゝゝてゝあれ〳〵調ゝ月にゝ〳〵

ゑまよしても長くとゞめてそことありて生ることかれは
つけくちふひと忘れしといへるなれ今君か歌く
さるひ世の倒の別なかて出のこゝろし舟の跡も思となり
て引やり捨てなれしその火ゆゑうちくへて兒女
の祭をわれなしの行くちく長く罕く往来外山家なる
ゑよとせとあむなりしかとて噫我今先達の顔しく
君とならむ君また先達の顔しくなちあらの身の上
とゞまらむへき只あらし此く年の行末をちなき
寄てそそかなしけれ

詫の膓長くたどる秋の空ら

賛補破茶碗辞

大極の気二つに破れて陰陽となる其の陰陽の
又あつまりて夫婦いもせの契となれり扨此
此茶碗のまろきにかたち月のまるきのことく一つは
破れて明の盈虚を示し会者定離をおしへて
離るものまた又あつまるも佛も我をおしへへき縁に
けふよ文あつむるを我に求む我田先生の言にきゝ
し騏は壮なる時一日に千里を走りし老とては駑馬
も先立つとかいへりて駑馬の老たるもの何のかたちを
かとゞむらく生より少にあらはく護花園あるも
そこに一人の好事ありしにより求むへし
あはしとこかりのあかれ只このあくとあるとに
先く我は火燵の山にかくれあかくてかしこに其文

成りし姫の茶碗のあやまちて懲りくいうまもそん
と敲くくらくよ果して金玉の響あり喰け茶碗
のうちにはけ文あくしとあざみの古刀探打の笛
ものの瑕ありて瑕あくて結目をいくむるのあるべし
嫦娥ら天上の藥ハいかきもて人間石うくしとい
ものあくむも

そのわれくに結ける巻きつけ巻
彼世世平よあくむりきり

贈分平菴文

平易をいくくうう分とくれうとと拙ふさくむ
のとけ菴只そのあれあにて呼く徐盃をつく
さむへき垣越のあるもうくしこの結ぶ
孤あくぬるも漣や軒のこうこの建ぬ
ハようくもみくんむつうくもとこ
分ハうくもされとも赤面ハものもにてうく
くも月まつ鏡ハあるし方あくの屋、宮宮
そのりハ一町をりもをるくしこてよ一えくとくみと
えりくよ四時のくあ景行生をうはくいくつき
されと屋ちうきよりくうもあれもつ生あくいるい
くくに只服ものの姿をい

絵の中にうくてくものあり
くくくくくくに掛きつしの月中あり墨四ち
えくとくくしえハ子苗元秋ハあくくえをハ大根

引とゞきかへりみよ一物四用にてもしれあるを句
なりさかきにきらふへうしるを得枝の上評にまさりし
ておくりものとふなるべき

猴頌

猿を不用のものなりとは我も諱し人の数なりけれ
ど他の一すハなくとも一尺ハなくてはならぬ世にやくなき
ものらへせむにハまつ家をてハ是なるべくなしとむかの
猿ハものハ今の素袋の諱もなししものハものやハ
いよゝ織の猿ちもおよばぬ世にありてものを費
ならず似るへうふそ人の支體に不用を論せば男の
乳なりしそいふなる謡れあるとも見てねかと今更
こゝろをとり捕らへ猿ハ渾沌王の面をげして世よ
なげなどこともみなるべしいてゝの猿ハ頓死急病の老ん
ことなきみもなづらにに灸すゆる時ハ泉水の眉逢
をいなる名もし多し捕らて猿のとしもなを只ゝあめ
ともよみなひんとく項羽が山を抜く力とけ垢を
落さて身よ落つとて扁鵲猿をかむとふ漢文の
古語にしく我朝に人を嘲りては猿が笑ふとも
いうなよきかりにつましき源右ありて猿なと
いふと語らましより天津乙の嗚神もこのかし
なりていふで見抓むとさなのより女ともへの亂
つかさハ麝香の狩人を出ゆるまるもまくなりもし
猿なるの古へとかへりて猿の猿よ經年の筆やそ

情田を独をめぐさせ八耳も及ぎず象も及ばず
れハうく風雅を大功あれと今ハ我身を行ふ
んとされと猿ハうるはしくもうれも
猿のトうらうんハ何ともやむ場ハよろこばれる
ひむとまたに天にこうの日ふく猿に二つの猿ある色
まれと上下の品定ハやめてうより只り井をそ所
ようとて

友ともむ猿ゐ以秋の言

金嶽樓記

樓然ヨリ南ヨリ金嶽とよぶハいとよきき
富士ヨリむうへをうらうも山樓の眺望東南ハ
ひらけられたかの金嶽のうちあいとよ里吟賞乃
田あり世あり村落あと社仏閣のこるあ
ちく画に似ぐ画ふ及へうて竜興寺より秋吟
して花まつ雨を催し猪投山の猪のまよ雲ちき
月と競ぐ下戸を餅につく名とて蓬ヶ島ヨリ
路をめぐりは上戸ハ酒の中りをうひて麹ヶ池よ
涎を流をへ一ちうと主客文章に富士をこて
まり遊ふ者皆一時の英才ようて新詩百篇瞬く
うちよりて雅談一日あくびをうらで和歌の文の
花もこうよ向ひて多香を増し天漢ヤの俳事
こうを舎而ハ宝むうるんを辞もううきき
をもうて詩歌の程ひよ餘りて拙文よ俳諧の

文を読んで甚だいとゞもさてゝ初んぬ孤子を捨ひ
てゝ母を探きあくまでも灰汁縁を深くこの為にされ
さまも不才なる行をいとゞ孤よあて行を立てゝ灰汁
よ代むされども我が父なるあり世に祭の桂浦の
幕毛毬よ鎖手とゝもうに槿花一日の栄をあす
ハ甚だるもの動うてゝられたまり叶ひにより生て
叶樓ハ年ゝに松樹千年の久しきを期ゝ〳〵
さるハたのたるもの動うして去る時〳〵ら
ぬ命迫るまてあり去られてあるゝ花を去る花は
幾代の齢をるもらう辛ふハ叶樓よ簫を吹く風に
かゝりて天涯地底ゝ我身を幸にこゝに生
あり！生涯の楽ふ〳〵はなのたゝ長の花者を眺ゝく

甚日の供ふハたつるへうゝてゝ

月花よ砂色富士ゝる日の終り